

## 東洋への道

バイキングがカナダ東岸を去ってから、およそ五百年という月日が流れた。一時は何千人の人が住んで大麦やからす麦を栽培し、牛や馬を飼い、北極熊や白はやぶさなどを輸出していたグリーンランド植民地も、エスキモーの増加、黒死病（ペスト）の流行などがあってだんだん衰退し、やがてヨーロッパから忘れられていった。

しかし、マルコ・ポーロの「東方見聞録」が伝えた黄金と香料の宝庫「カタイ」（中国）や「ジバング」（日本）を求める世界探検熱が十五・六世紀にヨーロッパ諸国を席捲し、いわゆる「大航海時代」が到来することにより、カナダは再び歴史の脚光を浴びることになる。

当時、アメリカ大陸の存在はまだ知られず、ヨーロッパから西へ行けば東洋に達することができると思われていた。その東洋には、黄金が無尽蔵にあつて、宮殿の屋根は黄金でふかれ、宮殿内の道路や部屋の床さえも純金をしきつめてあるというジバングが、そして金銀や香料の豊富なタイやインドが待っているノロンブスやヴァスコ・ダ・ガマの航海も、

東洋を発見するためであった。

しかし、肝心の黄金郷は、どうしても発見できなかった。

そこで、ヨーロッパから北上して西へ進めば、東洋への近道があるに違いない、と航海者たちは考えた。「北西航路」である。当時の地図によると、アジア大陸は現在のアメリカ大陸に迫り、カリフォルニアあたりから、ジバングが南にのび、現在のハワイの近辺にインドが位置している。コロンブスによって明らかにされた地図でも、ヨーロッパとジバング、あるいはインドの間には、いくつかの島があるだけだ。そこで、ポルトガルにインドへの道を先にこされたイギリスの国王ヘンリー七世は、北西航路をたどればインドへ近道できると主張するジョバンニ（ジョン）・カボットの申し入れを受けて彼を西方へ向かわせた。一行は一四九七年、

ニューファンドランドの東部沿岸を航行し、上陸してヘンリー王の名において土地の領有を宣言した。カボット父子はバイキング以来、北アメリカに渡った最初のヨーロッパ人と言われている。翌年、六隻の船を率いて再びインド航路の発見

に船出したが、失敗に帰した。

やがて、北アメリカの探検が進むにつれて、それがこれまで知られていなかった新しい大陸だということがわかってきた。しかし、詳しいことはまだ未知のままだった。探検家たちは、この大陸のどこかに、東洋へつながる海峡があるはずだと強く信じていた。ジョン・カボットの息子セバスチャンやイタリアの航海者ジョバンニ・ベラツァーノらが北西航路の発見に挑戦したが、発見はできなかった。

そして一五三四年、フランスの国王フランソワ一世は、すでにニューファンドランドやブラジルに航海したこともあるジャック・カルティエを北西航路の探検に派遣した。

二隻の船と六十一人の乗組員を率いたカルティエは、まもなくニューファンドランドに上陸し、ベル・アイル海峡を通ってセント・ローレンス湾の沿岸あたりまで探検した。船はさらに南下して、シヤリユー湾へ入った。これこそ東洋へ抜ける通路ではないかとカルティエは考えていたが、その希望は裏切られた。彼は再び北上して、セント・ローレンス川の河口にあるガスペ半島に上陸、そこに「フランス国王万歳」と書いた、高さ十メートルの十字架を立てた。カルティエはセント・ローレンス川をたどって行けば中国へ達すると確信していたが、ひとまずフランスへ帰って、出直すことになった。カルティエは、ヒューロン族の尊長ドンナコーナの息子二人を引きつけていたが、彼らが語るオオウミガラス、魚のと

れる海、森林、肥沃な土地の話は、それだけでも人々を興奮させた。

翌一五三五年、カルティエは三隻の船に一一〇人の乗組員、そして二人のインディアンを乗せてカナダへ戻った。今度は、セント・ローレンス河口にあるアンティコスティ島をこえて、インディアンがホチエラガと称するこの大河にまつすぐ突き進んで行った。一行は途中で尊長ドンナコーナと会った後、他の尊長との対抗心からその先の航行をあきらめさせようとするとドンナコーナの願いを振り切った。彼の息子の案内で先に進むことになった。船は現在のケベック市を過ぎ、やがてホチエラガというインディアン部落に到着した。現在のモントリオールである。しかし、その小高い丘（マウン・ト・ロイヤル）からセント・ローレンス川を眺めたカルティエは、全く気落ちしてしまった。ここから先は早瀬で、かなりいしか渡れないことが分かったからである。一行はあきらめて引き返す他なかった。

（一世紀後、この早瀬はラシオン・ラビズと名付けられた。直訳すると中国早瀬。中国への航路がいかに探検者たちの胸中を占めていたかを物語る名前である。）

フランスへ帰る前に現在のケベック市で冬を過ごすことになったカルティエは、そこで酋長ドンナコーナから胸のときめく話を聞いた。セント・ローレンス川から森を越え、山を越えたところにサゲネイという王国があつて、金やルビーを産